

「非結像集光装置による太陽熱発電」 海野 和三郎 (天文学者・東京自由大学学長)

れた。東京自由大学はアカデミックギャラリーの1mブースを借りて、非 結像集光装置などのポスター、設計図、ミニチュアモデルの展示と、 太陽エネルギーの特性、その長所を説明したパンフレットの配布と説 明を行った。ポスターは、近畿大学理工総研の湯浅学・川東龍夫氏に よる非結像集光装置の屋上での実験と装置の写真を拡大したものと、 大木健一郎氏による家庭規模非結像集光式太陽光熱発電装置の設計 図、ミニモデルは山村慶三氏製作によるもので、装置の説明に用いた。

太陽エネルギーの比類ない特徴は、何処ででも大量に得られること と、500℃程度の温度上昇が集光で簡単にできることである。火力発 電などの熱機関に於いて、同じエネルギー量に対する仕事効率(発電 量) は温度上昇を平均絶対温度で割った値の程度であるから、集光す る場合としない場合とでは、同じ太陽エネルギー量に対して太陽熱発 電で10倍程度の違いが出る。但し、凹面鏡やレンズなどによる集光で

2011年12月5~7日、上記展示会が幕張メッセ国際展示会場で行わ は、万年億年かけて地球が溜めた化石燃料を100年で使う安さには勝 てない。

> その点、我々の非結像集光では多数の平面鏡による反射太陽光束 が焦点距離に相当するある距離で中央鏡による反射太陽光束と重な る設計で、この平面鏡折り紙細工の第1鏡を極軸の周りに1日半回転す るシーロスタット駆動すれば、南側に置いた固定の平面鏡(第2鏡)で 反射させて、その真下のソーラーポットの底面(焦点面) に500℃程度 の温度上昇を簡単に得ることができる。

> 近い将来、太陽熱発電の装置が普及すれば、10万円か20万円程度で 家庭用1kW発電装置を町工場が製作するようになり、それが全世界に 普及して、エネルギー問題、地球環境問題、人口問題の根本的解決とな り、20年後の世界経済危機、50年後の世界戦争を未然に防ぐことも出来 よう。人類の前途は 太陽エネルギーを上手に使って生きる21世紀人類 進化にかかっている。資源小国、技術大国の日本はその先端にいる。

2011年度ゼミナール報告

仏道探求ゼミ~玉城仏教学を根底に~ 「維摩經 | 講読

安田 浩 (一般)

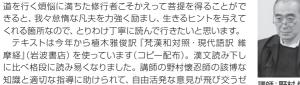
私たちのゼミは初期大乗経典『維摩経』を 読んで4年目に入りますが、仏陀の十大弟子 にも優る在家の菩薩が主人公の経典として、 また「煩悩を断ぜずして涅槃を得る」「衆生 病む故に我病む」「維摩黙然」といった語句 によってよく知られています。



昨年を振り返ると、ゼミが近づく度に、仏 教用語と格闘し解説書と首っ引きになる難儀

な月々でしたが、他方で大震災後を生きる者の一人として、無意識の内にも絶えず自 らの生き方が問われる1年でもありました。テキスト購読にもそれは反映したはずで

す。その点では現在読んでいる「第7章 如来の家系」も、非道の 道を行く煩悩に満ちた修行者こそかえって菩提を得ることがで きると、我々怠惰な凡夫を力強く励まし、生きるヒントを与えて くれる箇所なので、とりわけ丁寧に読んで行きたいと思います。





講師:野村 懐忍氏

海や空と共振していた。素朴さ、雅さ、美しさが共存 体験に胸が躍る。南の果ての島に息づく民衆の芸能 の魂に触れることができ、眠っていた太古の記憶が 蘇った?!! 竹富島へ、民俗芸能の宇宙へと導いてくだ

と神田の東京自由大学に八重山の風が吹いた。

と研究会の方々と15名で11月末から12月はじめに



竹富島「種取祭」の様子

鳥飼 美和子(担当)

主催せき島薗ゼミ「悲しみから生れる力」(受講者感想)

加藤一郎(会員・運営委員)



ミになればと期待しています。

(宗教学者· 東京大学大学院教授)

最終回の講義を聞いて、「悲しみ」と言っても一筋縄ではいか ないことがよくわかった。

「大切な人を失った悲しみ」を考えても「大切な」の意味は人に よって違うし、どう悲しいのかもまた違う。他人の悲しみを本当 に理解できているかどうかはとても怪しい。悲しみについて書か れたものを読むときも、人はまず自分の経験をあてはめて考え、 それを超えている場合は勝手に想像して読む。宮澤賢治の作品 をめぐって様々な解釈が生まれるのも当然かもしれない。

望むべくは事前に彼の宗教観や「大切な人」の特殊性を理解 しておかねばならないのだろうが、これは難しい。対象のない「絶

対的な悲しみ」というのも、自分の経験からはウツに近いものであろうと想像するが、 これを誰かを失った悲しみの激しいものだろうなどと誤解しないように注意する必 要があるだろう。

今年の島薗先生の講座も刺激的でいろいろ考えさせられた。

事務局だより

今年の夏合宿は岩手を中心に回ります。被災地の方々との交流も計画しています。 それにさきがけ、ご縁のあったボランティアグループ「サンガ岩手」より、大槌町のお母さ ん達が手作りした手芸品をお預かりし、事務所に応援コーナーを作りました。講座にいら した折、ご支援、ご協力ください。

している。闇の中を歩きながら歌うという不思議な

ご指導いただいている須藤武子先生が、民俗舞踊に目覚めたのは、琉球舞踊を見た

衝撃からだという。須藤先生の御提案で、琉球・八重山の民俗舞踊の宝庫・竹富島の

種取祭り見学の旅をすることとなった。旅の準備として種取り祭りの歌を習った。「しき

た盆」や「ユークイ」の道歌、巻き歌など、日本民俗舞踊研究会の増田良位さんが唄う

残念なことに須藤先生は体調不良のため行けなくなったが、東京自由大学のメンバー

竹富島に渡った。そこで見た種取祭りは、予想以上 のものだった。祈り、歌、踊り、全てが島の風や雨や光、 さった須藤先生に深謝。お世話になった民宿マキ荘 の皆さんにも感謝です。

自主ゼミ 民俗舞踊の身体研究会

自主ゼミ 荘子読書会 海野和三郎(天文学者・東京自由大学学長) 世界的名著、奇書として名高い「荘子」の読書会ですが、「荘子」の本質を理解する

人は少なく、2011年度の参加者は毎回4名または5名に止まりました。 殆どすべて の「荘子」文献に通じた碩学木村麻呂氏の案内解説があります。多くの人は、「荘子」 が「老子」又は「道教」と全く違う本質を持つことを知らないのではないでしょうか。 多数の参加を望みます。

自主ゼミ シュタイナーゼミ

鳥飼 美和子(担当)

西川隆範先生の指導で、シュタイナーの主著を次々と読んできた。「神秘学概論」 「いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか」、そして現在は「神智学」と読み進ん でいる。かつては女性の参加者が多かったが、今年は男性も多くなり、さまざまな 問題点を語り合い、熱気ある時間となっている。

■編集後記

岡野 惠美子(運営委員長)

昨年の3・11の大震災、マグニチュード9の東北地方太平洋沖地震及び福島第一原子力発 電所事故から早や1年が経ちましたが、未だに心身ともに激震の揺れの中にある心地です。 この大災害を契機に7世代先の子孫の幸せを考え、より良い未来の展望を拓きたいという 切なる願いが強まるばかりです。

2012年度は、特別企画・現代霊性学講座第2弾「古事記1300年~鎌田東二の超古事記論」 を5月、6月、7月と3回、「三省祭り」を10月下旬に開催します。また若者達が主体的に企画 するユース企画が新たに発足するなど、講座、ゼミ、合宿を含め充実したカリキュラムが準 備できました。同封チラシをご覧いただき、みなさまのご参加をお待ちしています。

Ohttp://homepage2.nifty.com/jiyudaigaku/ • E-mail: jiyudaigaku@nifty.com

Newsletter Vol.18 2012年 (平成24年) 3月21日発行

編集・発行 NPO法人東京自由大学 / 事務局 〒101-0035 千代田区神田紺屋町5 T.Mビル2F TEL&FAX: **03-3253-9870** デザイン (有) アンビエンス / 印刷 (株) ベクトル

NPO法人東京自由大学 Newsletter 2012.3.21 Vol.

現代霊性学講座第一弾 ~連続シンポジウム~

NPO法人東京自由大学の特別企画、現代霊性学講座のシンポジウムとして、「仏教 は世界を救うか?」を行なった。1年半に及ぶこの連続3回のシンポジウムの参加パネ リストは、井上ウィマラ氏(高野山大学准教授)、藤田一照氏(曹洞宗国際センター所 長)、西川隆範氏(シュタイナー研究家) の3名。

第1回目は「仏とは誰か?」をテーマに2010年9月19日(日) に開催した。各パネリ ストが「わたしはいかにして仏と出会い、仏教徒となったか」を、それぞれのライフ ヒストリーを交えて語り合い、ブッダという人間の歴史的意義を探り、個の発心(発 菩提心) と仏道修行と仏法探究の意味と可能性を議論した。 コメンテーターとして、 戸田日晨氏(遠寿院荒行堂住職) と野村懐忍氏(高野山東京別院執事) を招いた。

第2回目は「仏法は真理か?」をテーマに2011年3月5日(土) 開催。 苦からの解脱の 教えと実践である仏教がおよそ2500年の歴史の中でどのように多様・多彩に展開・ 変容してきたかを語り合った。

第3回目は「仏教は社会に有用か?」をテーマに2011年10月15日(土) 開催。第2回 目の後すぐに起こった「3・11」東日本大震災の体験とそれを踏まえて仏教の社会性と 現代性、サンガ(僧侶共同体) について論議した。

この全3回の連続シンポジウムを通して、仏教という解脱と智慧の求道の試みが、 過去現在未来に至るさまざまな自己探求に多大な洞察・指針・示唆・覚醒を与え続 けてきて今日に至ることを改めて再認識した。そして日本には、仏教が多様なままで 保持されながら、在来の神道とも深く相互浸透しつつさらに多様に展開されてきたこ とを確認した。その神仏習合という形での相互浸透と共存の持つ未来可能性と有難 さ・重要性についても確認ができた。仏教は人類史の一大文化遺産であり、探求者 にとって、生きる指針となり、知恵と実践の源泉である。

東京自由大学は、霊性の探究を基軸において自由な学問的探求と芸術的表現を二 本柱にしつつ進めてきた。パネリストの三氏はそれぞれに長らくボディーワークや唯 識ゼミ(仏道探求ゼミ) やシュタイナーゼミを担当していただいた東京自由大学の常 任講師のような方々である。三氏に共通していることは全員は1950年代生まれで、み なともに、お寺の生まれではなく二十代で出家求道し(井上氏はテーラヴァーダ仏教、 藤田氏は禅、西川氏は密教の真言律宗)、長期の海外遍歴滞在体験があり、それを踏 まえて、今この時代に自分が学んできた実践や思想がどのような意味と役割を持って



左から鎌田 東一氏(司会)・藤田 一照氏、西川 隆範氏、井上 ウィマラ氏(バネリスト)

いるのかをそれぞれに鋭く深く追求してきた点にある。ヴィバサナ瞑想、禅、シュタイ ナーへの沈潜と参入を通して、この現代世界の中で何を果たしうるのかという問題意 識を胸に、独自の活動を展開しながら、この混迷する現代社会の中で、変容しつづけ る仏法の可能性を未来社会に向かって訴求するシンポジウムであった。今、そのシン ポジウム記録をまとめつつある。それを2012年5月には単行本として地湧社より出版 する予定である。

以下に、そのさわりの目次項目をいくつか紹介しておきたい。

「生きている意味ってなんだろう? ブッダもまた自ら生きる苦しみの中を歩き通した人 だった。事典を抜け出た仏とは? ブッダは、行く手の開けた道を先に歩いている人。仏 教が保存タイムカプセルしてきた「生き方の型」を現代に検証する。経験でなく行為指 向のよき手引きとしての仏教。シュタイナーを通してブッダに出会う。死を越えて生を認 識する。仏教における「行」。ブッダの「行」と悟りについて。性欲あるいは禁欲について。 ブッダと霊界。現代に即した新しい仏教とは? 仏教が示す世界をシステマチックに伝え る。現象に即して説かれた縁起。解脱の判断基準とは?「空」は真理か? 末法思想をど うとらえるか? 日本仏教の大きな三つの流れ。 時代背景の中で求められる真理。 真理と は凡夫には分からない。大乗仏教とは釈迦の人生を通してみる真理を生きること。教え のネガティブ面とポジティブ面のバランスが必要。認識と臨床のはざま。3・11をふまえ て仏教の役割を問う。サンガとは自覚に基づいた共同体。今こそサンガ的共同体が力を 発揮する時。霊魂からみる仏教の役割。供養の意味と働き。慰霊・鎮魂の役割。仏教 瞑想とサンガはいかに役立つか。震災のグリーフ(悲嘆) ケアを発端に。苦しみを乗り 越える契機としてサンガがどう役立つか? 次の世代を育む力。 仏教瞑想が見直されてい る。仏教を基盤にしたコミュニティづくり。サンガ的な共同性をもったコミュニティの形 成。無常観を突き抜けたところに問われる復興。出家在家によらず可能性はまだ秘め られている……」。出版の折は、ぜひご一読をいただきたい。

2011年度〈三省祭り〉

「火を焚きなさい~山尾三省の三つの遺言に聴く~」

2011年10月29日(土)報告

鳥飼 美和子 (理事·副運営委員長)

2011年は山尾三省さんが亡くなって10年目、また福島の原発事 故が起こってしまった年である。今こそ三省さんが遺した「神田川の 水が飲めるようにする、原発を全て取り外す、憲法九条を世界の憲 法に」というその遺言や生き方を次世代につなげていきたい。その ような願いを込めて、同世代を生きた証言をパネリストの槇田きこ り但人さんやコメンテーターの中野民夫さん、山尾三省氏の著作を 出版しつづけている野草社の石垣雅設さんに語っていただき、三省 さんとは直接かかわりを持たなかったけれど、共通する価値観であ る持続可能社会を実現するべく活動している丹羽順子さんに、次世 代代表としてお話していただいた。さらに、三省さんと「部族」とい うコミューン活動時代からの同志であった詩人の長沢哲夫氏とミュ ージシャンの内田ボブ氏のミニコンサートがあり、会場は三省さん たち世代のスピリットに包まれた。

槇田さんは、三省さんは同志というより憧れの人であったこと、 弱小コミューン連合のキャラバンの途上での出会いから共に活動 した長元兄弟商会、ほびっと村、プラサード書店のこと、科学技術 について、テクノロジーについて、エネルギーについて三省さんと 語りあったこと、また、これまで触れてきたオルタナティブなエネ ルギーについて語った。そして、三省さんは言葉を与えてくれたこ と、モヤモヤしている思いに、すっと言葉を与えてくれたという。 その一つは「より納得できる人生と、より納得できる社会」を実 現するということだと語った。

丹羽順子さんは、生前は知らなかった三省さんのスピリットは自 分のライフスタイルとピッタリあっているという。そして三省さんの 三つの滑言をひとつひとつ取り上げどれも宝硯されているとは言え ないが、その方向に向かっている、未来への可能性があると語った。

それは自らの活動である衣類の交換会「xChange」のこと、また、ナ ビゲーターを務めているFMラジオ・J-WAVEの番組で、はじめは自 己規制していた社会についての思いを率直に語ったら、思いのほか すんなり受け入れられたこと、グローバルに目を向ければ、「オキュ パイ」など世界中で起こっている反格差社会デモのことなど、すで に多くに人は意識の変革がおこっていると語った。司会の鎌田東二 さんは三省さんの言霊に共鳴するという。

野草社の石垣さんは、70年代、80年代からの濃密な人間関係と 活動を語り、三つの遺言の最後にあった「豊かな個人運動」という 言葉に注目をあてた。それは多くの人が良き目的を持って活動して も集団や組織のなかでの落とし穴があることをその人生の途上で身 をもって知っていた三省さんの思いであるという。

中野民夫さんは会場からの「これからの若者に求めたいものは」 という質問に、その「個人運動」という言葉を、ジョセフ・キャンベ ルの「自分の至福を求めなさい」という言葉へと飛躍させた。自分 の至福とは三省さんの言う真事(まこと)、いのちの至福。 それを求 めてゆくことは利己的なことでなない、互いが正直に生き生きとあり

合えるまっとうな社会が生まれるはず。制度やイデオロギーを超 えたものを出現させると語った。それぞれの思いが溢れて熱気を帯 びた今年のトークセッションとなった。続いての宇々地さんと野村 雅美さんの即興演奏と参加者による詩の朗読によって、三省さんの いのちとカミへの祈りの言葉を心身に響かせることができた。

「火を焚きなさい~山尾三省の三つの遺言に聴く」というテーマ の今年度の三省祭りは、大きな困難を背負った現代日本を生きるた めの魂の火となった。その火が小さくとも引き継がれ、輝き続けま すように。感謝合掌。



人類の知の遺産 (第VI期) 報告

井上 喜行 (担当·事務局長)

$4/9(\pm)$ $\lceil C \cdot S \cdot \mathcal{N} + \mathcal{N} \rceil$

井村 君江 (妖精ミュージアム名誉館長)

ミソピーク(神話を作る人) ルイスについて、オックスフォード生 活を描いた映像、井村先生の亡夫ジョン・ローラー、トールキン、 イエイツ、ナルニア国物語の「不思議と驚きが生きる力」の話。



10/8(土)「西行」

吉増 剛造(詩人)

前年の講義依頼からの経緯を解き明かし、芭蕉、朔太郎、大震災、 『裸のメモ』、完全に吉増ワールド。後半は善通寺の西行庵の映像 (剛造シネ) とこの日のための資料(剛造メモ) による詩話。



5/8(日) 「ユング『赤の書』」

河合 俊雄 (京都大学こころの未来研究センター教授)

長い間、封印されていたユングの日記、監訳された先生からの直々 の解説とあって多数の受講者でいっぱいのなか、自伝との関係、 マンダラ、第一次大戦、「海辺のカフカ」など詳説。



11/5(土)「与謝野晶子」

松平 盟子 (歌人·与謝野晶子研究家)

堺の菓子商に生まれ、詩人、歌人、童話作家、源氏物語の現代語訳 など夫鉄幹の協働を受け、多彩に生き、文化学院の創設に貢献した 晶子を、末女森藤子さんの映像、晶子の肉声などを交え、語った。



6/11(土)「ドラッカ**ー**」

海野 光三郎 (プラスエンジニアリング株式会社創業者)

実務家としていかにドラッカーを活用したかを、リクルートパンフ の言葉や名言集を引いて、「真摯」マネジメント、マーケティングを 組織の中核に、企業は家業でないので世襲はしない、など解説。



12/3(土)「一遍」

竹村 牧男 (東洋大学学長)

浄土教の教えから説き起こし、「法然の念仏、親鸞の信心、一遍の 名号」、略年譜、熊野本宮での夢告、播州法語集から「名号第一」 の一遍の教え、手放す心さえ手放す、念仏が念仏する、など詳説。



7/9(土) 「ジョン・ケージ」

藤枝 守 (九州大学大学院教授·作曲家)

9/10(土)「荘子」

玄侑 宗久(福聚寺住職・作家)

代表作「4分33秒」の映像から楽譜(ホワイトスコアと時間・空 間・線・点)、音と聞くとの関係、小泉八雲の耳なし芳一、シェー ンベルク、プリペアドピアノ、音符からの解放、易経など。

無為自然の人、やむを得ずの人、南華真人・荘子の「国との関係」

について、道教(心斎)・儒教(通天)から3.11まで説かれた。「往く」

荘子「還る」老子、後の先なので「祈り」はない、など。



1/4(土)「井上円了」

菊地 章太(東洋大学教授)

哲学館を創設し、妖怪学の講座をはじめた円了を、幻燈機を使っ て、円朝、柳田國男、泉鏡花から京極夏彦まで、マンダラ解説風 に、迷信からの脱却という明治文明開化期の哲学者を語った。



2/11(土)「寺山修司」

鎌田 東二 (京都大学こころの未来研究センター教授)

出生からのホラにはじまり、職業「寺山修司」の世界を長編叙事 詩「地獄篇」を中心に高橋和己、太宰治、三島由紀夫らとの関係、 ロートレアモンの「マルドロールの歌」の影響など多岐に及んだ。



全10回を通じ、東日本大震災を十分に踏まえての講座でした。

アートシーン21 Part IX・報告 ~クリエイティブな世界を切り開く表現者たち~

長谷川 その (担当・運営委員)

「立松和平を語る」

福島 泰樹氏 (詩人、法昌寺住職、早稲田大学理工学部・日本大学芸術学部非常勤講師)

'09年の三省祭りではお元気だった立松氏。アート シーン21のご講義を約束されていたが果たされなかった。'11年度 第一回は、立松氏と40年の交友を結ぶ福島氏をお迎えし、湧き 出る思い出が語られた。常に進化し行動し続けた作家の創作秘



道、昨年の屋久島で催された東京自由大学夏合宿にご一緒される など、交流も深まり、今年で3回目のご登場。「あがたワールドに浸 りたい」と、リピーターが多い。ギターを爪弾き、つぶやくように歌 う曲は、代表作『赤色エレジー』他『俺の知らない内田裕也は俺の知っている宇宙の夕焼

あがた森魚氏(歌手、シンガーソングライター、

音楽活動40周年を迎えるあがた氏。一昨年の北海

「歌のちから Part3」

話をはじめ、艱難辛苦の果てに確立して行く作品の世界と背景となる時代に話題は及 んだ。代表作『遠雷』と『性的黙示録』を、福島氏のNHK朗読教室の大河内さんが朗読。 質疑応答後、福島氏の魂を映しだす自作の詩歌、中原中也、寺山修司の作品を謳い上 げていただく。前担当吉田さんのご子息・ご息女を交えてのひと時でした。合掌。



「『玄牝―げんぴん―』を通して今思うこと」

河瀬 直美氏 (映画作家)

前担当、吉田さんの熱意が根底にあり、実現に漕ぎ つけた。『玄牝』の映画上映と奈良からお越しいただいた河瀨監督 のトーク。朝の雨模様が午後からは天と感応したかのようにからり と秋晴れに……。第一部は上映会と45分のトーク。第二部は映画 上映のみ。『玄牝』は岡崎市にある吉村医院に集まる、臨月を迎え た妊婦さんたちの出産までの経緯を描いたドキュメンタリー。質



疑応答では、スクリーンに映しだされた命の尊さ、大切さに共感した意見が寄せられ、温 かく誠実な対応の河瀨監督の人柄にも魅了される。

時間露光に火を取り込んだ作品、定点撮影に時間軸と空間軸を取り込んだ風景



体現されていた。

7/23

「折口信夫から読み解く— 現代日本文学」

け』、『ケイコ先生』など。「今は亡き、吉田さんを偲び、追悼する気持ちで歌った」と語られ

る。コーラスではみながひとつになる瞬間があり、あがた氏の"歌のちから"を鮮やかに

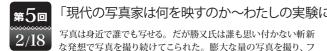
安藤 礼二氏(文芸評論家、多摩美術大学芸術学科 准教授、同大芸術人類学研究所員) '11年最後のアートシーン21には若者の支持が厚い安

藤先生をお迎えする。遠くは下関、茨城、仏留学生の姿もあった。 ご講義は一巻の絵巻物を見るかのように、巧みな話術でよどみなく 一気に語られた。折口信夫の『死者の書』、柳田國男の『遠野物語』 を端緒に、作品の根底に流れている呪術的・精神世界の影響を受

けているという現代日本文学を、三島由紀夫、大江健三郎、村上春



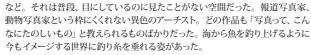
樹の3氏の作品を通して、独自の視点で語られた。さらに南方熊楠の『南方二書』や鈴木大 拙の『天界と地獄(翻訳)』、西田幾多郎の『善の研究』まで、話題は縦横無尽に拡がった。



「現代の写真家は何を映すのか~わたしの実験について」

勝又 邦彦氏 (美術家、写真家、多摩美術大学非常勤講師)

動物写真家という枠にくくれない異色のアーチスト。どの作品も「写真って、こん レシキブルで自由な選択眼でそれらを組み合わせていく。水平線に伸びた街、長 なにたのしいもの」と教えられるものばかりだった。海から魚を釣り上げるように





21世紀世界地図総括 ~不透明な未来に一石を投じたい~

山口 卓宏 (担当·運営委員)

今年度の5人の先生に共通している点は、それぞれの分野で、「一石を投じる」活動を続けているということである。 社会全体にどこかあきらめムードが漂う中で、「未来を見る勇気」を先生方からたくさんいただきました。

【4/16(±) 「宇宙天文学-新しい宇宙探検」

中野 不二男先生 (JAXA主幹研究員·作家)

6/18 (±) 「これからの『正義』」

紀の正義である。

小林 正弥先生 (千葉大学法経学部教授)

普通の地図からは読み取れない古代の道などを、宇宙衛星でとらえた写真データを利用 して解明していく学問が「宇宙人文学」です。このやり方で、古代の東海道のルートがか なり正確に浮かび上がってきました。また、青森県の縄文遺跡・三内丸山遺跡も遺跡の すぐそばまで海が迫っていた姿が、データから正確に浮かび上がってきました。この方法 を利用すれば、縄文時代の遺跡の立地の共通点や、交易の範囲、またそのルートなどが 解明できる。そしてこの方法は、世界中の遺跡等にも応用できるはず。

リーマンショック以後、それ以前の「リバタリアニズム」(市場原理主義)は行き詰まりをみ

せた。特に日本においては、3.11以後、ますます「公共哲学」の必要性を、日本人全体が

気付きはじめている。原発の危険性が明確になってしまった以上、「脱原発への道」を日

本は、決然と選択するべきだろう。長期的に見れば、原発は最もコストのかかるエネル

ギーであるという認識に立ち、今後のエネルギー対策を進めるべきである。それが21世

山下 泰子先生(文京学院大学名誉教授・NPO法人日本ネパール女性教育協会理事長)

ネパールに対する日本人の一般的イメージは、美しいヒマラヤトレッキングである。しか

し、この国の男女差別の過酷さは、日本に伝わっていない。ある少女は14歳から子供を

産み始め、8人目にしてようやく男子誕生。男子誕生まで子供を産み続けなければならな

い。非識字率も女性の方が圧倒的に高く、学校にも満足に行かせてもらえない。地域に

よって生理中の4日間は、家に住むことが許されず、村はずれの小屋や洞穴で過ごさなく

てはならない。この状況を変えるために、ネパール人の女性教師を増やす活動を続けて

9/17(±) 「21世紀を生きる−ネパールの少女に未来を」

いる。女性教師が学校にいれば、少女たちも学校に行きやすいからである。



山下 泰子先生 11/19(±) 「今、教育を問う!ーシュタイナーと宮沢賢治の精神と教育実践」

鳥山 敏子先生 (NPO法人東京賢治の学校代表)

「人は前世の課題をやるためにこの世に生まれてくる。その課題を解決したいという気持 ちを邪魔さえしなければ、子どもはどんどん学んでいく。」鳥山先生は、シュタイナーのこ の教育観を文字通り、NPO法人東京賢治の学校で実践していらっしゃる。しかも、日本 人の魂の基層にある宮沢賢治の精神を融合しながらの実践である。本当の意味での『生 きる力』は、外から与えることはできない。知的能力育成重視の現代の教育は、『生きる 力』を子どもたちから奪っている。その事実を謙虚に受け止めたい。あと2・3年で、東京 賢治の学校の卒業生が日本の社会に出てくる。とても楽しみだ。

【 1/21(±) | 「国連と20世紀、そして21世紀の日本の課題」

伊勢 桃代先生(財団法人日本国際連合協会理事)

北欧の国を除いて、日本ほど治安が良く、教育が社会全体に行き届いた国は世界にほと んどない。しかし、残念なことに日本人は他者との議論がとても下手である。自分の意見 を述べることが、相手の人格を傷つけることにはならないという国際感覚が希薄なため、 外国人との対等なコミュニケーションが成立しない。日本人は自分たちの哲学をしっか り持ち、経済成長至上主義に代わる価値観を確立する必要がある。そのためには、小学 生の時から自分の頭で考え、自分の意見を発言できる能力を育成する必要がある。

身体の探究 報告 ~身体という"自然資源"の可能性~

鳥飼 美和子(担当・理事・運営委員)

2011年度の身体の探究は、今注目のお二人の講師が 登場。熱気にあふれる講座となった。

6月25日「可傷性と脆弱性一弱さと痛みの身体論」。 講師は大学を退職されて、いよいよ肩書は武道家、と おっしゃる内田樹氏。当初のテーマからどんどん発展 して、武道とスポーツをめぐる構造的、本質的な問題 点が明確になるスリリングなお話。武道とは本来自分 の持てる先天的資源、あるいは環境的資源全てを使っ て生き延びるための技術であり、古代的、太古的なも



ので、他人と強弱巧拙を比較することではない。むしろ相手は自分自身であるようなもの。 一方、スポーツとは優れて政治的、共同体的なもの。ルールの下で強弱を競い合うことは 国民国家の制度内で、その統合システムを強化する合理的な装置である。しかし日本の 場合、第2次大戦後に武道をスポーツ競技としたために多くの問題がおこっていることを 鋭く、且つ興味深いエピソードと共に語られた。

11月26日「瞑想を脳科学する」。講師は東邦大学医学部教 授であり、「セロトニン道場」の代表でもある有田秀穂氏。 大学の頃、趣味でダイビングをしていて呼吸に興味を持ち、 それがセロトニンの研究につながったという。生きるための 横隔膜による呼吸と、心を変える腹筋による丹田呼吸。そ の丹田呼吸によって出現するα波、心理テストの変化、前頭 前野の血流変化などおこり、それはセロトニンに起因する。 セロトニン神経が弱るとうつ病傾向となる。脳だけでなく体 内の全体にあるセロトニンを活性化する呼吸と意識的なリ ズム運動によって、過度に精神藥に依存しないで、うつやパ



ニック障害、過食や拒食など心の不調による病を改善できるという。どんな方法でもいい からセロトニンを活性化してほしいと語る有田氏。3.11以来、現代科学がもたらす文明が 複雑で取り返しのつかないものに変質する恐ろしさを目の当たりにした私たちに、ふたつ の講座は身体という自然資源の可能性を提示してくれたようでもあった。

スピリチュアルデザイン―コンテクストデザインワークショップ総括 2011年度

上林 壮一郎 (デザイナー・運営委員・担当講師)

植物は動物のように移動できない。それゆえ環境というコンテクストに依存した知恵を もっていると、竹村真一氏は「生命樹」の中で述べている。そんな植物の中でもモノづくり の材料としてよくつかわれる木をテーマにしてコンテクストデザインを考えた。

「新しい北山杉」 7月3日(土)

衰退が懸念されている京都の北山杉の新しい側面を発見することに挑戦した。削る、異 素材と合わせる、無関係なものと掛け合わせるなど試みた。なかなか難しいテーマであっ たが、発見もあった。一つは磨かれた表面の質感を生かすという視点。もう一つは縄文杉 の対極にあるのではないかという、場所的文化的極としての位置づけの発見であった。

「森の感覚」一森を感じるためのインターフェース 9月11日(日)

グラフィックデザイナーの島田岳史先生をゲスト講師に迎え、都市生活における潜在心 理的な森の感覚を探った。その感覚を葉っぱや木を使わずに日常生活の中で顕在化させる ためのインターフェース(装置)を作った。風でさらさらという音がするもの、木々を透かし て見る感覚、視覚と聴覚を刺激し包まれる効果をねらったものなどの発表が楽しかった。

「ネイチャートイ」―丸太を森にするおもちゃをつくる ◆11月20日(日)

東京おもちゃ美術館との共催で行ったワークショップの第2弾。昨年度は道具とおもち ゃの中間だったが、今年度は自然と人工の中間のおもちゃがテーマで、雑木林で拾った樹 皮がついたままの枝をつなぐブロックを親子で作った。作りながら枝の生え方に身を重ね た。最後は、すべてのブロックをつないで森を作った。

「樹木の造形」 一樹木の形態構造を変換する 1月5日(日)

格子のような均質空間ではなく、稲妻や樹木のような細かく枝分かれするコンテクスチ ュアルな形態構造で日用品をデザインできないだろうか。樹のシルエットをもとに、いわ ゆる樹木の形ではない方法で描き直し、それをもとに家具的な造形物を作った。

いろいろと探ってみて、木や植物にははまだまだ知恵が隠されていると感じた。今後も 探っていきたい。